

神戸市文書館と神戸大学大学院人文学研究科 地域連携センターの取組みについて

神戸市文書館 研究員

木原 正剛 きはら・まさたけ

1. 神戸市文書館の沿革

神戸市文書館は、平成元年（1989）6月1日に開館され、今年で25周年となりました。神戸市域に関する歴史的・文化的に価値ある文書や資料等をはじめ、「新修神戸市史」の編纂のために収集した史料を保存整理し、市民に公開しています。

当館は、戦前の神戸の大富豪で、南蛮美術蒐集家として著名な池長孟（いけなが はじめ）氏が、私立の美術館として昭和13年（1938）5月に建築した建物を、戦後神戸市が池長氏より美術品と共に寄贈を受けました。（写真1）

当時は、「市立南蛮美術館」の名称で、神戸市立唯一の美術館として、昭和57年に南蛮美術品等が市立博物館に移転されるまで、広く市民に親しまれていました。

「アール・デコ」様式のシンプルなデザインで、外壁にはモザイク・タイル、柱には和泉産の青石を使うなど、神戸モダニズムを表す建築物の一つ



写真1

とも言われる颯爽とした建物で、美術館展示室の1階部分を現在、「閲覧室」として使用しています。（写真2）



写真2

さて、当館をどのような位置づけの施設にするかは、種々議論があったようですが、平成元年は神戸市制100周年にあたり、記念事業の一環として昭和63年度より新修神戸市史を編纂・刊行することになり、その拠点施設として史料の整理や市史の編集編纂を行うための歴史館としての性格をもって、当館は開設されました。

所蔵の史料等の閲覧を目的とする来館者数は、開館当初の平成元年度は年間計230人でしたが、市史編纂による当館所蔵の史料の充実や、市史関連の論文集「神戸の歴史」の刊行、独自の歴史講演会活動や企画展の開催など、市民向けの広報等を精力的に行った結果、平成25年度は1,307人の来館者（表1）を数えるようになりました。

表1 来館者数の推移

		(単位:人)					
年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
来館利用者	323	425	362	491	765	855	814
年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
来館利用者	682	820	845	920	931	1,157	856
年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度 (8月末時点)	
来館利用者	758	859	1,979	1,581	1,307	505	

2. 阪神・淡路大震災とその影響

平成7年(1995)1月17日に発生した大地震(阪神・淡路大震災)は、神戸市文書館にも大きな影響を及ぼしました。第二次世界大戦時の神戸空襲にも耐えた館そのものに大きな被害はなかったものの、同年5月7日まで閉館を余儀なくされました。

また、主たる業務の神戸市史編纂は、昭和57年(1982)に編集委員会を設置して、震災までに5巻刊行しましたが、震災後の復旧・復興事業が優先される中、平成8年から10年まで休止となりました。(表2)

平成11年度から再開した市史編纂事業は、平成14年度末にも市の“事業見直し”によって、市史編纂作業中の2巻を除いて“凍結”の方針が出さ

れるなど、再度の事業中断を余儀なくされました。

しかし、平成17年度には歴史編Ⅱ「古代・中世」の編纂作業を再開、引き続き平成21年度には、産業経済編Ⅳ「総論」の編集委員会体制を再構築し、翌年度から編纂作業を再開し、それぞれ刊行することができました。

一方、神戸市文書館の業務は平成15年度以降、市史編纂事業も含め、市の直営から市の政策形成に寄与する調査研究や市職員の政策形成能力向上のための研修業務等に多数の実績等を有する「公益財団法人神戸都市問題研究所」に委託されました。同研究所の持つ大学等との連携や、共同研究によるノウハウの蓄積があり、それらを活用することで、より効率的に市史の編纂や史料の調査研究活動を進めることができると期待されています。

表2 新修神戸市史 編集発刊状況

編別	巻別	収録内容	調査・執筆	発刊年度
歴史編	自然・考古	自然・考古	昭58	昭63
	古代・中世	古代から戦国時代まで	昭59	平4—震災—平9……平17—→ <u>平21年度末</u>
	近世	織豊政権の成立から幕末まで	昭58	→平3
	近代・現代	明治維新から昭和の終りまで	昭59	→平5
産業経済編	第一次産業	農林漁業	昭58	→平元
	第二次産業	造船・鉄鋼・酒造・マッチ・ゴム等	昭61	→震災—→ <u>平11</u>
	第三次産業	貿易・海運・流通・金融等	昭63	→震災—→ <u>平15</u>
	総論	近現代の神戸経済史・労働運動等	平2	→震災—→平22—→ <u>平25年度末</u>
行政編	市政のしくみ	近現代の神戸市政史(組織・財政等)	平2	→平6
	くらしと行政	民生・衛生・環境・教育・消防等	平3	→震災—→ <u>平14</u>
	都市の整備	建設・都市計画・港湾・開発等	平4	→震災—→ <u>平16</u>
生活文化編 (未刊)	民俗・風俗・宗教・思想・芸術・建築等(未定)	民俗・風俗・年中行事・あそび等 学術・宗教・思想・美術・文学・建築等 (検討課題)	——編集体制未定(震災により休止)——	……平成26(検討課題)→

(注) 昭：昭和 平：平成 ——：編纂期間 ……：休止

3. 神戸大学との連携事業

神戸大学とは、1980年代から文学部の史学科を中心に、新修神戸市史編纂準備に向けた交流が行われており、当館が誕生した当初から、史料整理・収集の面で、協力をいただいていた。

震災時には、当館においても積極的に被災家屋から滅失・散逸の危険を回避するため救出した古文書を收容し、その際には、神戸大学文学部内の「歴史資料保全情報ネットワーク」と連携して古文書の保全に努めてきました。さらに、神戸市の緊急地域雇用特別交付金事業を活用して、これら古文書の読解、複製物・目録作成等について歴史資料保全情報ネットワークに事業委託して、閲覧等ができる状態にして、市民に公開できるように努めてきました。このような活動を通じて、人文学の研究者と20年以上も交流が続いています。

また当館は、レファレンスの充実、地域歴史資料の整備の充実を図るための事業を、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターと連携して実施するために協力要請を行い、平成18年度から共同研究事業がスタートしました。

4. 連携事業の内容

当館は貴重な地域資料を収集しており、これを活用して市民に還元することが必要です。そのために歴史に精通した人材を確保するため、神戸大学に専門能力のある人材の派遣を求め、これを通じて、市民に対して史料に関してより効果的なレファレンスや、公開方法等を実践的に共同で研究しています。

また、大学はこれらの活動を通じて、閲覧者への質疑応答力、市民対応力・説明能力の向上を目指したキャリアアップが図れるとともに、当館の地域歴史資料の内容に精通して、収蔵資料の目録整理、収蔵経緯等の整理、活用方法の検討、閲覧方法の改良等が構築できるノウハウを得ることができます。

これまでの8年間の共同研究により、平日午後のレファレンスの継続実施、また市民等から寄贈・寄託を受けた古文書の整理による目録整理・

解題の作成が進み、これらを広く市民等に公開することができた結果、先のとおり入館者数の増加につながりました。

あわせて、当館所蔵の史料を使用しての企画展の開催や神戸市史編纂事業における連携事業の実施も入館者増加の大きな要因となっています。

5. 企画展の開催

当館では開館当初から、様々な形で史料等に関する閲覧・展示に取り組んできましたが、平成19年度に、古文書担当の指導主事（教育職）が配置されなくなったために、館単独で実施することが困難となりました。

そこで、神戸大学との連携事業の一つとして、平成20年度から、神戸大学地域連携センターと共同主催して、当館の史料を活用した「企画展」を開催しています。（表3）

また企画展は、本館閲覧室等を利用して、パネル展示と当館史料の展示を中心に開催していますが、平成23年度以降は、古い写真やアルバムを利用したスライド等の映写を行う展示も行っています。

当初3カ年は、寄贈いただいた古文書を取り上げた展示を行ってきました。江戸後期の兵庫津とその周辺（平成20年度）、明治期の神戸の政治と都市整備（平成21年度）、明治期の旧兵庫津地域の港湾発展（平成22年度）を題材としました。

平成23年度は、ドイツ人のレファート氏から寄贈いただいた写真をもとに、写真コレクション展を行いました。写真やスライドショーを見て、昔を懐かしく思い出される方や生まれる前の神戸の姿に関心を示される方が多数あり、またレファート氏をはじめ、日独協会の関係者、外国人の知人・友人や多くの市民の来館がありました。

平成24年度は、戦前の神戸を襲った大自然災害の「阪神大水害」をとりあげました。谷崎潤一郎の「細雪」にも出ていますが、日中戦争下の大災害という視点で展示を行い、平成25年度は、市史刊行（産業経済編Ⅳ「総論」）に合わせた企画展示を行いました。

表3 神戸市文書館「企画展」の開催一覧

	開催テーマ	内容	展示物等	期間	参加者数
平成20年度 (2008)	「井上善右衛門家文書展」	江戸後期から明治にかけて、兵庫西出町に居を構え、油の販売や回船問屋営んできた豪商の古文書等の展示。兵庫津を中心とした絞油業・廻船問屋業の様子を伝える文書や油の材料となる菜種・綿実の密輸事件を伝える文書、蝦夷地交易に用いられたと思われる航路図などを紹介。	パネル展示(兵庫津・井上善右衛門家文書、明治時代の兵庫、灘目の油しぼり、灘目の水車小屋、日向屋の廻船経営、兵庫津の船事情、蝦夷地各港航路図(文化4年)、妙栄丸下動定帳(嘉永5年)、油方御改革写(天保3年)等)	8月18日～29日、 9月16日～27日	来館者 167名
平成21年度 (2009)	「鹿島秀磨と明治の神戸」	第1回総選挙から大正期に至るまで計8回代議士として活躍した鹿島秀磨の生涯と、神戸の近代都市化を重ね合わせた展示。明治10年代から大正に至るまでの兵庫県下の政治的動向や著名な政治家・名望家(福沢諭吉)等と交わした書状により交流の様子などがうかがえる。また、政界だけでなく、近代鉄道の整備にも尽力し、神戸市の水道布設にも深く関与している。	パネル展示(鹿島秀磨の生涯、都市神戸の近代化、鹿島秀磨をとりまく人々、年賦等)、政談演説会開会席(明治15年)、兵庫第1区衆議院議員選挙人名簿(明治20年代)、鳴滝幸森(初代神戸市長)書簡(明治28年)、摂津電気鉄道株式会社(のちの阪神電鉄)取締役役当通知書(明治31年)、秀磨の写真(パネル展示・明治4年、同11年、大正10年8月)等)	9月7日～25日	来館者 134名
平成22年度 (2010)	「兵庫運河のあゆみ」	東南に突き出て、風波・潮流が激しく航行に危険を伴う和田岬沖を迂回する兵庫運河は1889(明治32)年に完成し、兵庫の港を支える大きな役割を果たしてきたが、この兵庫運河開削を主導したのが、八尾善四郎である。「八尾家文書」の史料をもとに、兵庫運河の歴史をふり返る。	パネル展示(兵庫運河の計画、兵庫運河株式会社の設立、会社経営の困難、市営化と八尾善四郎の顕彰、震災と八尾家文書)、兵庫運河地図・実測図(明治35年)、兵庫運河株式会社の株券(明治44年)・印鑑・会社印(年代不詳)、兵庫運河開通式記念品等)	11月8日～26日	来館者 219名
平成23年度 (2011)	「レファート写真コレクション」	大正期から神戸で貿易・保険業に携わっていた、ドイツ人のオットー・レファートが所蔵してきた、大正から昭和戦前期にかけての神戸が映し出された写真・絵葉書を、子息のヴァルター・レファートより当館が寄贈を受けたのを機に、写真展を開催した。	パネル展示(レファート家略年譜、神戸の居留地と外国人、商店街・百貨店のにぎわい、鉄道網の広がりと郊外レジャー)、写真展示15点、その他写真100点余を「スライドショー」によって上映。	10月3日～21日	来館者 1,228名
平成24年度 (2012)	「戦時下起こった阪神大洪水」	日中戦争勃発後の1938年(昭和13年)に神戸・阪神間を襲った、阪神大洪水について、当館所蔵の記録写真や神戸市の行政資料などから、その被害の状況・復旧の様子を、当時の時代背景を読み解きながら紹介する。	パネル展示(水害直後の神戸、生活の再建へ、災害時の市民「動員」、神戸の産業と災害、戦時と災害)、神戸市災害概況図(1939年)、文書類(昭和13年度水害報告綴、昭和13-14年度農業土木費災害復旧補助申請書綴等)、その他(神戸水害復興助働奉仕記念誌、神戸新聞、神戸又新日報)等)	10月1日～19日	来館者 942名
平成25年度 (2013)	「近代神戸の産業経済史」	新修神戸市史『産業経済編』IV「総論」の発刊を前に、神戸港開港に始まる神戸経済の勃興と発展、人やモノ、各産業の動きを写真や資料で紹介する。 併せて、昭和5年の「海港博覧会」の様子や、昭和8年の当時の神戸に元気を与えるために始まった「みなとの祭」の華やかな情景など、所蔵の記録写真や歴史資料なども展示する。	パネル展示(開港場神戸と産業発展、神戸と農業・漁業、戦後神戸と観光都市、栄光と破綻—巨大大商社鈴木商店、等)、兵庫及び神戸の絵図(文久年間)、兵庫港遊歩規定図(明治9年)、親艦式参列艦艇絵葉書(昭和5年)、第1回みなとの祭宣伝ポスター・パンフレット類(昭和8年)等 写真スライド(昭和8年・みなとの祭)及びビデオ(昭和12年頃・観光の神戸)を上映	3月9日～22日	来館者 428名

6. 神戸市史編纂と連携事業

平成17年度から再開された神戸市史歴史編Ⅱ「古代・中世編」の市史編纂事業(表2)については、先の神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの「共同研究」に加えて、史料・文化財の調査について神戸大学との共同研究による委託調査を行いました。当館保管の史料・行政文書をはじめ、市内各地域の神社・仏閣、個人、各大学や関係学術機関等に協力を依頼し、史料等の調査を実施しました。

多くの新事実が確認され、市史の記述に反映させることができましたが、その際の調査成果を広く市民の方々や研究者に公開しながら、同時に編纂を進めるという手法をとりました。

具体的には平成18年度から23年度までの6年間に、歴史講演会3回、発行記念講演会、シンポジウムのほか、歴史展示会も2回開催して(表4)多くの市民の方々に参加いただき、その時その時の調査研究成果を発表することができました。

7. おわりに

当館は最初に触れたように、神戸市域に関する歴史的・文化的に価値ある文書や資料等をはじめ、「新修神戸市史」の編纂のために収集した史料を保存整理し、広く市民に公開しています。

とりわけ、市史編纂関係の史料のうち、大正7年(1918)神戸開港50周年記念事業として刊行された第1集(表5)は、その編纂に際して、史料の収集を目的として、「編集員」を全国各地の関係機関・個人等に出張させ、また官公署への照会、古老への聞き取り等を幅広く行っています。市史としては「別録」「資料」としまとめていますが、当時収集した資料は「神戸市史第一輯編纂資料」として119冊が引き継がれています。

さらに、一部史料についてはマイクロフィルムだけではなく、紙ベースでも所持しています。たとえば、神戸居留地関係の英字新聞(ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド、ヒョーゴ・ニューズ、ヒョーゴ・シッピングリスト、コーベ・クロ

表4-1 新修神戸市史歴史編Ⅱ 編纂関係 歴史講演会

	開催テーマ	開催日	開催場所	参加者数
第1回	「福原京と源平の争乱」と「南北朝期から摂播平氏勢力圏を考える」	平成18年11月26日(日)	兵庫公会堂	250
第2回	「戦国時代の神戸・中世の兵庫津」	平成19年8月18日(土)	兵庫公会堂	235
第3回	「神戸古代史散策」と「室町・戦国期の村と国衆～北摂・東播を中心に」	平成20年1月26日(日)	神戸市 勤労会館	298
発刊記念 講演会	「新市史編集から見てきた神戸の古代と中世」	平成22年3月28日(日)	神戸市 勤労会館	306
シンポジウム	「清盛・縦横無尽」	平成24年3月25日(日)	神戸 朝日ホール	500

表4-2 新修神戸市史歴史編Ⅱ 編纂関係 歴史展示会

	開催テーマ	展示物等	期間	開催場所	参加者数
第1回	「中世石峯寺の古文書と出土品」	後村上天皇繪旨、羽柴秀吉制札写等文書、江戸中期の「石峯寺絵図」その他発掘調査による出土品	平成18年12月2日～11日	神戸市文書館	131
第2回	「神戸の中世再発見」	管領斯波義将施行状、片桐且元判物写等文書、蒔絵桜花南蛮人文絵鞍、他出土品	平成20年2月8日～17日	神戸市文書館	402

表5 過去の神戸市史編纂事業の概要

市史	各冊	契機	編集時代	編集期間	内容
第1集 9冊	本編総説、本編各説別録2冊、資料3冊索引、附図	神戸開港50周年記念事業	古代 ～ 大正7年	大正7年 ～ 大正13年 (7か年)	本編総説 兵庫開港から明治22年4月1日の市制実施を経て大正7年までの歴史 本編各説 上記の詳細を記述 別録 1 古代から開港前まで 別録 2 港湾史、海運史、貿易史 資料 主として明治以前の古文書を収録 附図 元禄9年の兵庫津絵図、慶応4年神戸町図、明治2年兵庫町図など珍しいものを収録
第2集 3冊	本編、別録、索引	昭和8年 上記事業の継続	大正8年 ～ 昭和8年	昭和9年 ～ 昭和12年 (4か年)	本編 大正8年から昭和8年まで 別録 中世の兵庫及び港湾史など収録、第1集と同じ構成である。
第3集 4冊	行政編、社会文化編、産業経済編、索引年表編	新庁舎 落成記念事業	昭和9年 ～ 昭和40年	昭和32年 ～ 昭和43年 (11か年)	行政編(昭和37年3月)、社会文化編(昭和40年11月)、産業経済編(昭和42年3月)、索引・年表編(昭和43年12月)に刊行。 第2集以降の時代を記述

ニクル、ジャパン・クロニクル) や、明治初期から第二次世界大戦時にかかるまでの間発刊された神戸又新日報は、その見易さもあり、多くの閲覧者に好評を得ています。

「神戸又新日報」は、明治17年(1884)に神戸で発刊された日刊新聞で、明治19年から、廃刊となった昭和14年(1939)までその存在が確認されていますが、当館では、神戸又新日報を紙焼き製冊で閲覧することができます。これらの特徴を活かして、地域の歴史館としての役割を果たしていきたいと考えています。

また市史編纂についても、次の「生活文化編」の編集にあたっては、神戸大学地域連携センターとともに検討委員会を設けて、具体的な編纂方針・内容等をつめていきたいと考えています。

一方、神戸市では阪神・淡路大震災に関連する公文書等について、歴史的な価値が大きいと考え、当時の公文書等を大量に保存し、現在、順次整理作業を行っています。今後これらの歴史的資料を適正に保存管理していくためには、大規模な保管スペースが必要となりますが、当館は、建物延床792㎡、書庫145㎡の規模であり、他の同様施設に比しても狭く、スペース不足の問題はさらに深刻となっています。

今後、既存資料の保管方法の改善・整理や一部資料の分散保管、保存文書の基準など他事例も参考にしながら検討を重ね、貴重な歴史的・文化的価値のある財産を活かすため努力してまいりたいと思います。